

第4講：36「定めた心」

おやさと研究所嘱託研究員

八木 三郎 Saburo Yagi

入信までの経緯

増井りんは、天保14年（1843）2月16日、河内国大県郡大県村（現、大阪府柏原市大県）に、父善治、母うのの一人娘として生まれた。両親の間になかなか子宝が授からず、8年目にしてようやく生まれたのがりんであった。壊れ物に触れるかのごとく大事に育てられたようである。2歳の時、熱病に罹り医者の手当てを受けるもの一向に良くなり、医者に匙を投げられたところ、氏神の鐸比古神社に父善治は昼夜をいとわず一心に祈願した。そのかいもあってか、重篤な病も数日後には全快した。6歳から11歳まで大県村の学者小山千齊に読み書きを習っている。12歳からは大阪から来ていた裁縫の師匠について学び、また、祖母の許でさらに裁縫を仕込まれた。

文久元年2月、りんは19歳で婿をもらい、その後3人の子供を授かっている。満ち足りた日々を送っていたが、明治5年（1872）、30歳の時に父親と夫を相次いで亡くしている。その精神的打撃、苦痛からなのか、明治6年頃からりゅういん癩（胆嚢炎）を患い、夜になると腹部の鈍痛で眠れない日々が続いた。医者にも易者にもみてもらい、大和の小房観音にも平癒の願掛けを行っている。しかし、症状は治まらず、生駒郡の灸医者、瓢箪山の稲荷や辻占いなど各地に願掛けに向かっていた。そんな中、いよいよ人生の大きな転換期となる明治7年を迎えた。同年10月25日の朝から深夜まで裕の着物を縫い、ようやく出来あがった26日の朝、りんの両眼は痛みで腫れ上がり、見えなくなった。その後、医者にかかりあらゆる手当を施してもらいが、回復することはなく、医者より「ソコヒ」と診断され、この眼病によって、りんはおぢばに引き寄せられた。

「ソコヒ」

りんのソコヒについては、どのような症状であったのか、詳細は定かでは無い。わが国では眼病の治療は、古くから行われていたことが記録に残っている。16世紀の永禄・天正年間の医学書『眼目明鑑』によれば、ソコヒ（内障）とは、角膜と水晶体の間にある「虹彩」より奥の部分の眼疾患の総称をいい、血内障、石内障、黄内障、黒内障、青内障、白内障、赤内障の7種があると記されている。その治療方法は、点眼、眼薬投与のほか、内障針（鍼）などを使った手術療法が記されている。ソコヒは「針をたつこと」と記載され、とりわけ針を用いて手術することを重要視していた。

ソコヒの用語は現在では、白内障や緑内障という言葉に置き換わっているが、昔も今も変わることなく、多い眼病である。目を酷使する現代社会の生活の中にあっては、視覚機能・視力の低下は誰にでも起こりうる。近視、遠視、乱視、老眼をはじめとして、白内障は50代の半数、60代の7～8割、70代は8～9割、80代にはほぼ全員が白内障になるといわれている。そのほか、緑内障や加齢による視力の低下は決して珍しいことではなく、多くの人が経験している。

逸話の内容

りんは眼病を患い、失明してしまう。悲嘆の涙にくれる中、12歳の長男幾太郎が道で出会った人から「大和庄屋敷の天竜さんは、

何んでもよく救けて下さる。三日三夜の祈祷で救かる。」という話を聞いて、早速親子で大和の方を向いて、三日三夜のお願いをするが、一向に効能はあらわれない。そこで、男衆の為八を庄屋敷へ代参させることになった。為八は、赤衣を召された教祖を拝み、取次の方々から教の理を承わり、その角目角目を書いてもらって、もどって来た。そして、りんは「教の理を聞かせて頂いた上からは、我が家のいんねん果たしのために、たすけ一条の道を通らせて頂きます」と家族一同、堅い心定めをして、一家揃って三日三夜のお願いに取っかかった。おぢばの方を向いて、なむてんりわうのみことと、繰り返し、繰り返し、お願いし、三日目に不思議な全快の御守護を頂いた。

その後、おぢばにお礼参りをした際、教祖から「さあ〜一夜の間に目が潰れたのやな。さあ〜いんねん、いんねん。神が引き寄せたのやで。…さあ〜楽しみ、楽しみ、楽しみ。」と眼病を通してお手引き、引き寄せられたことを伺い、さらに今後はお屋敷で勤めるよう、それも楽しんで通るよというお言葉を頂かれた。

逸話からの思案

この逸話は、ソコヒによって失明した眼を教祖によって救っていただき、また眼が見えるようになったご守護の話である。天理教では入信して鮮やかなご守護をいただく話は山ほどある。しかし、必ずしもそんな事例ばかりではない。今回の眼病を例にとって言うならば、見えない眼が見えるようになる、また聞こえない耳が聞こえるようになる、歩行不能の人が歩けるようになることを願って、それがご守護だと信じて神様に願い、信仰するものの、中には現状のままという事例も少なくない。奇跡とも言うべきご守護を願い、はたまた因果応報的に教えをとらえ、今生で悪いんねんを果たし、来生は少しでも人並みに、五体満足を願う信仰が「障害」の分野には数多くある話なのである。

天理教の教えは、五体満足を追い求める教えではない。陽気ぐらしを妨げる心のほこりをはらい、いかなる中でも陽気ぐらしができることを説く信仰である。今を生きる、生かされている今に喜びを見だし、我も他者も共に互いたてあい、たすけあいの心になってもらうことが目標なのである。

私見を言えば、仏教の伝来以降、長い年限の中で日々の出来事、現れた物事を因果応報的に解釈することは無きにしも非ずである。しかし、戒め的な教理の説き方は、ややもすれば当事者へのステイグマになり得る危険性をはらんでおり、現代社会ではそぐわないことなのである。

悟り方は「一名一人」でそれぞれに異なるだろうが、重要なことはさまざまな繋がりの中で今の自分が存在し、あくまでもポジティブにその中をいかに日々勇んで陽気ぐらしの心で通るのである。その心づくりの日々を追い求める信仰が天理教である。

今回の逸話に登場した増井りんは、自らの眼病から「だめの教え」を知り、その患いを通して「たすけ一条」の心定めをして、教祖の御教えどおりに生涯通られた方である。しかし、この逸話はただ眼が見えるようになったご守護、奇跡を説いたお話ではなく、ややもすれば御利益信心になりがちな心に信仰とは何かを深く思案させていただき逸話である。